

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

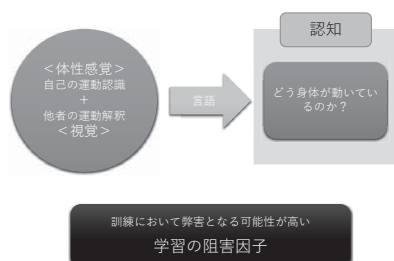
## ＜症例研究発表＞右視床出血による、空間性言語の障害により失行症様の症状を呈した 症例～注意と意図に着目して～

著者	唐沢 彰太
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究 Vol.13 別冊
巻	13
ページ	45-53
発行年	2019-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00011182/">http://id.nii.ac.jp/1060/00011182/</a>



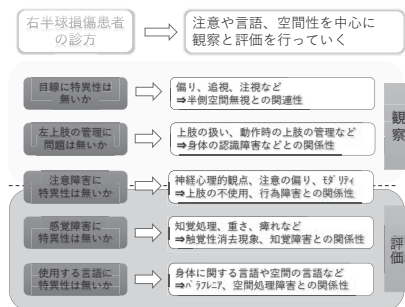
## 空間性言語

- 上下、左右、前後、外内の様に方向の意味を有する言語。
- 曲げる、伸ばす、開く、閉じるなどの運動の意味を有する言語。
- 関節の様に自己空間の意味を有する言語。
- 空間認識障害を有している場合、特異的に空間性の言語に障害が生じる場合がある。

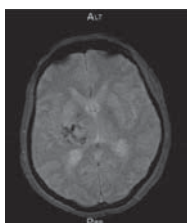


## 症例紹介

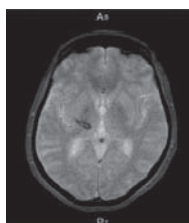
- 50歳代女性
- 右利き
- 右視床出血（発症から2年経過）
- ADL自立
- SLB装着・杖使用し屋外歩行自立
- IADL交通機関使用し自立
- HOPE：左手と足の動きを改善したい



発症時



1ヶ月後



予測される現象①  
右半球損傷であると言う事

仮説

※リハ室に入ってきた時点で観察（仮説）

外部空間の認識⇒視線、周囲の環境との距離感

身体認識⇒身体の動かし方

注意の運用⇒きょろきょろしていないか

体幹の非正中性⇒歩行中の姿勢

上肢への意識（情動）⇒座位時や歩行中の上肢の管理

予測される現象②  
右視床出血であると言う事

仮説

半側空間無視の有無  
空間系の言語の運用  
運動障害の程度  
感覚障害の程度  
体幹の状態  
感覚フィルターの状態  
疼痛の有無

問診、評価

観察

□きょろきょろはしていないが、歩行中常に足元を見て歩いている。動画撮影時などは前方を見て歩くことは可能。

□座位では左上肢を大腿の上に置くなど管理は良好。

□体幹は左立脚時に左側屈見られ正中性乏しいか。

□歩行時には内反が見られ、膝の動きも見られない。また上肢は肘屈曲位。

問診

- 顔面から左肩甲帯にかけ灼熱痛あり。
- 歩行中の内反は自覚あるも視覚性、その為膝関節の動きなどは自覚なし。
- 上肢は感覚がほぼ無いと。身体失認様ではないか。
- USNは発症当初見られていたが現在は自覚ない。
- 言語は問題ないとの事だが、口周りの動きにくさの自覚はあり。

目標設定

「左手を動かせるようになりたい」（抽象的...）



何が出来ようになりたいのか？

※現在日常生活で麻痺側上肢は何が出来ているのか？

この視点から、もっと何がやりやすくなりたいのかを明確にすることで訓練を開始できる。

「料理をしている時に物を抑えたい！！」

評価

✓運動障害の程度（動画）

肩関節の運動は外転・内旋が見られるステレオ

⇒画像との一致見られるも改善可能性あり

✓感覚障害の程度

前腕から先においてのみ空間定位難しい

複合感覚において形状認知、複数刺激認知低下

⇒画像から注意の影響が強い可能性高い



検査

✓高次脳機能障害

a, 失行様の症状が見られている。（言語による影響）

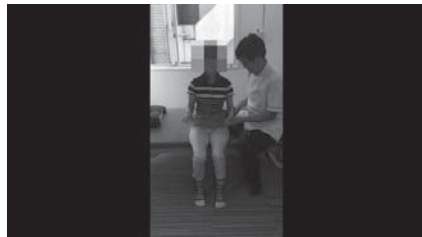
⇒diaschisisの影響か

a, 視空間認知問題ないが身体空間において認知低下

b, 運動イメージ能力の低下

c, 感覚記憶の保持困難

⇒前頭-頭頂葉の機能低下が考えられる



身体と運動の言語化

a, 「重い」

⇒自分で動かしたときに重く感じる

b, 「まっすぐ動いているように感じない」

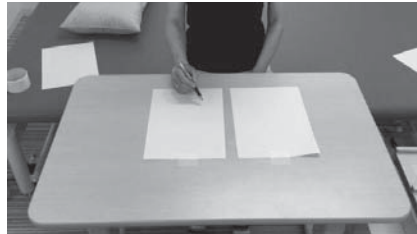
⇒他動的に上肢を動かしたときに水平面でのずれを感じる

c, 「〇〇が出来ない」

⇒出来ない事への執着が強い

パーソナリティ

- a, 言語・運動覚共に運動イメージの想起困難
- b, 動作の性急さ見られる
- c, 身体への注意に優位性見られるも深部感覚への注意の焦点化が困難
- d, 出来たことより出来なかった事の学習が行われやすい
- e, 自己中心の空間認知の困難さあり
- f, 主体感にずれが生じている

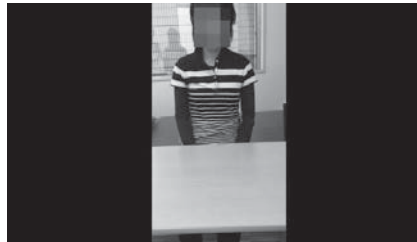


「運動イメージの検査」

病態解釈（仮説）：テーブルに手を乗せる

- a, 手部の表象の問題  
⇒自分がどう動かしたいか、どこを動かそうとしたいのかと言う意図の喪失。  
知覚障害にもとづくイメージ想起の問題。
- b, 肩・肘自体の問題  
⇒共同運動様の動きが見られる。肩甲骨の著明な代償。

視覚による確認作業が顕著化している。  
※運動学習が起りにくい状態である。



改善可能性（仮説）

- a, 空間性言語の認識向上により自己認識能力が向上し学習しやすくなるのではないか
- b, 発症から現在までの経過と画像から、早期にリーチングを獲得できるのではないか
- c, 空間認知や注意障害などの改善により知覚が向上し動作自体の改善が可能ではないか

訓練：行為獲得に向けて

- a, 運動と言語の整合性の獲得
- b, 自己を中心とした座標系における上肢の位置の認識
- c, 空間認知課題（視覚と体性感覚の整合性）
- d, 意図の明確化（身体性の明確化）



これらの訓練により、自分の意図に基づいて身体が動いてくれると言う事の獲得とフィードバック誤差学習の活用出来る事を旨とする。

訓練：絵カード

a, 運動と言語の整合性の獲得

ある運動をした時に、どの関節がどのように動くのかを言語化してもらう。

※自分の身体がどのように動いているのかを明確化してもらうために行う。

⇒運動学習への準備

訓練：五目板

b, 自己を中心とした座標系における上肢の位置の認識  
右上肢との比較をすることで体幹の正中性と左手の事を知ってもらう。



自分で動かす時に、手の事を知るうえで必要な作業。

訓練：タブレット

c, 空間認知課題（視覚と体性感覚の整合性）

d, 意図の明確化（身体性の明確化）



実際に自分で動かす段階も加え、「どこにどの様に持っていきたいのか」を明確にする。

結果：行為がその人らしく出来るように

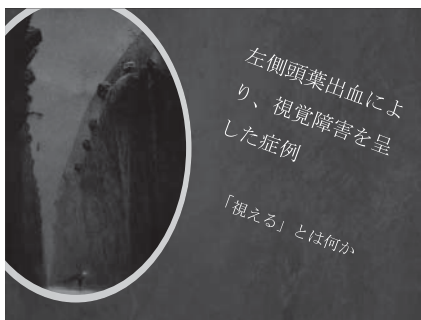
a, 「重くなくなった」

b, 「自分がどう動かしているか分かってきた」

c, 「思い通りのところへ手が行くようになった」

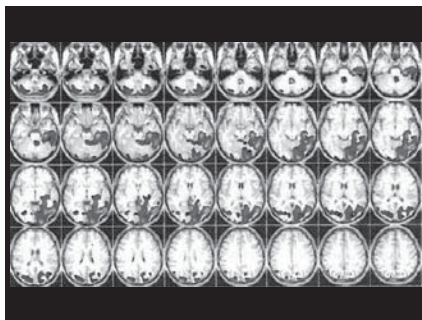
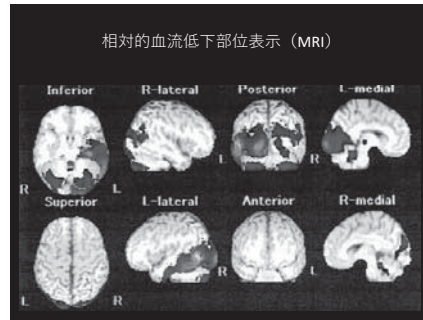
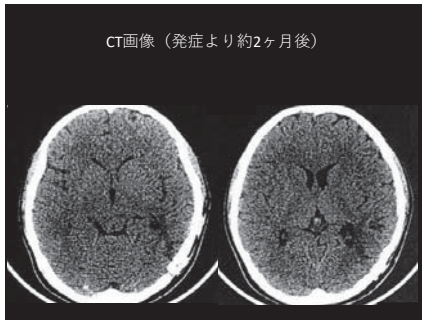


意図と結果の誤差が軽減したことにより主体感の構築が出来た。



症例紹介

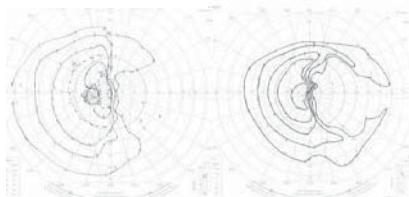
- 10歳代女性
- 左利き
- 左側頭葉周辺出血（発症から半年経過）
- ADL自立
- 著明な運動・感覚麻痺見られず
- 主訴：右側が見えない、言葉の理解が疲れる
- HOPE：元通りの生活に戻りたい



### 「見えない」という言語の理解

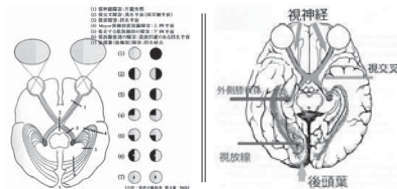
- 見えないと言う認識の中にどのようなファクターが隠されているのかを考えていく必要がある。
- 何が見えないのか、何なら見えるのかを評価していく必要がある（脳内処理に基づいて）
- この時、問診から視覚に対してどのような認識を持っているのかを聴取していく。

### 視野検査（発症時）



<左目>

<右目>



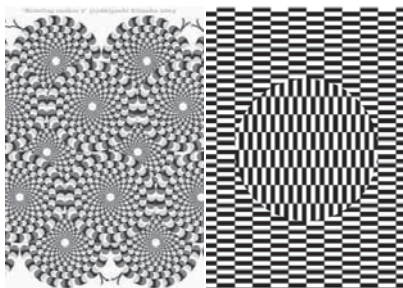
半盲...？

## 視覚に関する発言

- 動いている物を見失う（卓球など）
- 文字を読むのがとても疲れる
- 右側が見えにくい
- 全体を見るのが苦手

## 特徴

- ✓錯覚を感じやすい。
- ✓間違い探しが苦手。
- ✓仮名拾いテストでは、後半にミスが増加し疲労感が強い。また、文章の内容は全く認知されていない。
- ✓雑音が多いと疲労感が強い。
- ✓視覚性の言語認知と視覚の問題が混在している。



## 視野の評価

### ➤ 視野検査

- ①見えるか見えないか
- ②指を把持する



視野検査の時には「見えない」と  
言っていた場所においても、  
把持の時はほぼ正確に把持することが出来る。

つまり、見えていると言う自覚が無いにもかかわらず、視覚情報を運動時の座標への変換は正確に行えている可能性が高い。



## 盲視

- 見えていると言う「自覚」が無い  
⇒ 見えている対象に対する意味付けが出来ない。



□ 視覚イメージへの集約

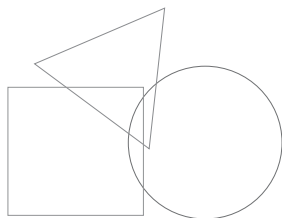
⇒ 体性感覚の視覚イメージへの変換

これは、言語による役割が大きい

□ 体性感覚の運動イメージへの拡大

⇒ 表在感覚や運動覚の統合による運動イメージ

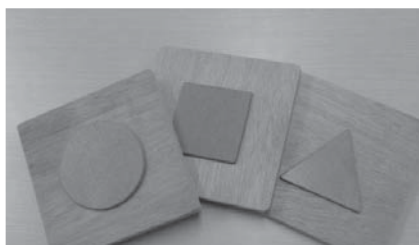
イメージの困難さ



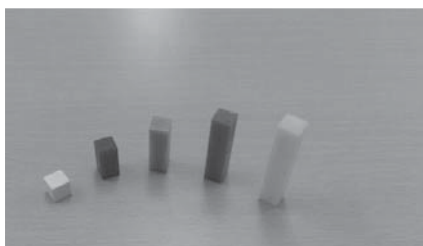
自分の体がどうなっているのか？  
また、何を描いたのか？

- ・ 視覚情報の意味付けにおける問題と視野の問題が混在している。
- ・ 更に、視覚での言語理解の困難性も見られ読解に対する負の情動が垣間見えている。
- ・ 視覚においては、体性感覚から視覚への集約の必要性が高く、本改善により視覚の明瞭性が向上する可能性がある。
- ・ 発話と言う側面ではなく、運動実行に関する言語の運用から介入する必要がある。

病態解釈と訓練可能性



訓練①「何を描いているのか」



訓練②「手がどうなっているのか」

結果

- ✓ 視界が明瞭になった。
- ✓ 右側で動いている物を追えるようになった。

※訓練において知覚を利用し、視覚イメージを無意識的に想起させることによって、右側で何が起きているのかを意味付けすることが容易になってきた。

